

立本寺蔵 妙法蓮華經金字宝塔曼陀羅図について

宮 次 男

撮影を行った。その結果をここに発表する次第である。

一
なお、本論の題名についてであるが、この図の名称についてはいまだ一定の呼称がなく、昭和四十六年十月発行 本山会編『日蓮宗の本山めぐり』Ⅲ関西・佐渡篇では「法華經一部文字宝塔」と記載し、「日蓮聖人展」では前記の「細字法華經字塔図」と呼び、昭和四十七年二月二十一日―三月五日の新宿三越での「日蓮聖人ゆかりの靈宝展」では「紺紙金字法華經一字宝塔経」と称している。そこで、中尊寺蔵の旧名称最勝王経十界宝塔曼陀羅、新名称「金光明最勝王経金字宝塔曼陀羅図」に仿って、「妙法蓮華經金字宝塔曼陀羅図」と呼称することにした。

二

經文を書写して塔形を形成した絵画作品としては、中尊寺の金光明最勝王経金字宝塔曼陀羅が古くから著名であるが、このほか談山神社蔵法華經曼陀羅、教王護国寺蔵法華經文字塔などわずかではあるが、しかし優れた遺品が伝えられている。これらの金字塔遺品について関心を寄せていた私は、近年「美術研究」及び「仏教芸術」誌に調査結果と私見を發表した⁽¹⁾。ところが、昨年十月、はからずも法華經文字塔の一遺例の存在を知って、歡喜すると同時に、自分の見聞の未だ狭少なことに恥入ったのである。私がこれを知った機会は、京都府立総合資料館で昭和四十六年十月九日―二十四日に開催された「日蓮聖人展」を參觀した折で、そこで京都立本寺蔵細字法華經字塔図一幅（八幅のうち）を見いだしたのである。その後、立本寺貫主細井友晋師にこれの調査と写真撮影の機会を与えられるようお願いした所、快く許可していただいた。昭和四十七年三月十一日、当研究所写真室の市川和正技官と大阪市立博物館学芸員神山登氏に同行を願って、立本寺におもむき、この宝塔曼陀羅の調査・

立本寺蔵の金字宝塔曼陀羅は、八卷本法華經の各卷をそれぞれ一塔にあてて、紺紙に金字で書写し、塔の周囲に金、銀泥で経意を図画したもので、掛幅装に仕立てられ、八幅完備している。その法量は縦約一一・五糎、横約五八・七糎である⁽²⁾。各幅の上地題中央に紺紙金字の題簽（縦一二糎余、横四糎余）が貼付けられて（但し卷三は題名が書いてない）

る(挿図1)。この題簽は書体も本紙の経文と異って、むしろ古様であり、別本の法華経経卷の外題を転用したのではないかと推察される。

各幅の裏面には左記のような墨書がある(挿図2参照)。

法隆寺上宮王院北室之重寶不可出渡于他所者也 康安二年^壬七月下旬比奉修

復之畢

(以上別古紙貼付)

八幅表具之寄進主中川佐渡守久恒公御息女^俗左津女

于時仙石越前守政明公御内室^法清耀院圓珠日淨

上宮太子御眞翰於武州江城奉修復之者也

天和元年^辛霜月十三日 立本寺廿三世 日通(花押)

これによると、此の曼陀羅は、もと法隆寺上宮王院(東院)北室の重宝であつて、康安二年(一三六二)七月に修補したことがわかり、その時点では法隆寺に蔵されていた。これが天和元年(一六八一)に江戸にて修復されたわけで、その時にはすでに立本寺の什宝に納っていた。またその表具は仙石越前守の内室が寄進したものとしてゐる。なお、「上宮王院北室之重宝」という記文に関連して、法隆寺舍利殿の宝物目録である「舍利殿宝物註文」⁽³⁾という文献の「後代安置物等事」の項目にみる

一 法花之八塔八補 箱ニ入 (追筆)
「先年沽却」

という記事は、この字塔を指しているものと考えてよいであろう。荻野三七彦氏によると、この文書は、舍利殿宝物の前後四回にわたる校合を記録したものであるが、最初の一通は天文一十九年(一五五〇)の校合に際し書いた文書、次の一通は天正一十九年(一五九一)の校合に作られたもので、その次の慶長一四年(一六〇九)の校合に際しては此等前二回に使用した文書を利用し、更に慶安五年(一六五二)に現品校合が行なわれた時にも前三回の文面に異同を註記し加点を行っているといふのである。前記した条項は天正一九年度の文書であるが、勿論天文一九年度の所にも同文がみられる。ただこの追筆「先年沽却」は天正一九年分にだけあつて、何時の追筆か明らかでないが、いずれにしても江戸時代のはじめに売却されたことは明らかである。それが奇しくも立本寺に伝わった「法華之八塔」ではないかと私は推論するのである。

挿図1 法華経金字宝塔
曼陀羅 卷一 題簽
京都 立本寺蔵

挿図2 同 卷一 紙背銘

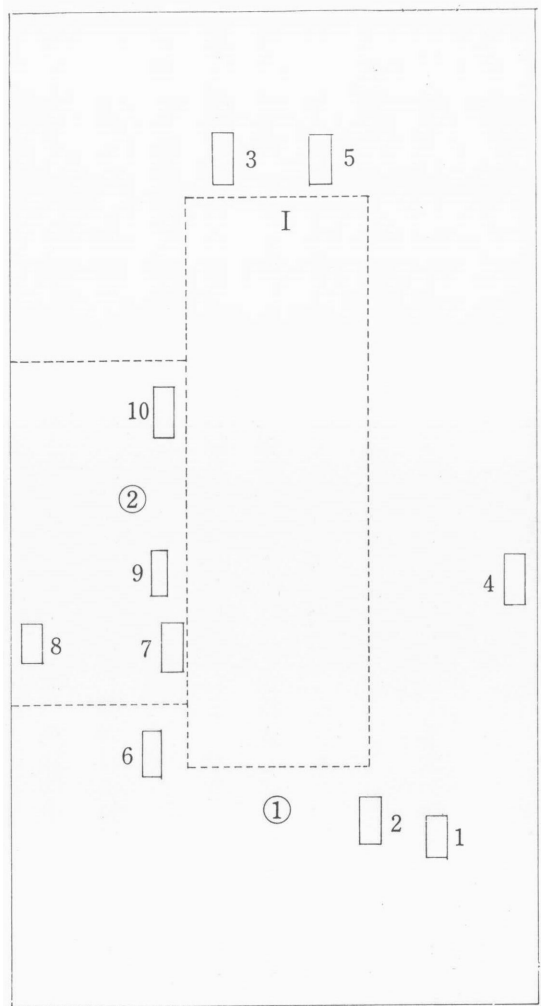
既に述べたように、この法華經金字宝塔曼陀羅は紺紙に金銀泥で描いて、画面は縁辺に約一・五糎幅の唐草の文様帯を描いて区画している。唐草の主莖は金泥、葉部は銀泥で、二本の銀泥線で文様帯の枠が引かれている。画面中央に金字の文字塔が三間九層であらわされ、初層は扉が外側に開かれて、その正面に并坐する二仏が金泥で描かれている。各階には連子窓が左右にあり、連子は緑、枠は朱、腰板が銀で塗られる。長押と通肘木及斗栱で区切られた軒下の部分は、中央部が上から銀、金、左右部は金、銀と市松模様風に塗られ、また中央の扉部は金泥である。基壇は周囲に高欄が設けられ、正面の階段にもそれはつづいている。字塔の文字は金泥で書写しているが、予め型様のもので塔形を定め、字の行間を鉄筆様のもので区画して字の配列を指定している。八塔とも同寸同型になっているのはそのためであろう。その書き出しは、相輪の中心頂上から始まり、相輪部、第九層以下順次下方へ進んで、最後は基壇正面の階段の最下段右端(向って)の所で終っている。その際、巻末の「妙法蓮華經卷第一」と巻末の經名と卷数を記して完結しているのは巻一、巻二で、余白のある場合、巻三は「願以此功德不」と、頂經偈⁽⁵⁾を書き加えている。この頂經偈を加えた巻は、その他に巻五、七、八があり、巻四は頂經偈の代りに「妙法華經」の四字が加えられて終っている。また、巻六は經文が長くなりすぎるため、はみ出る部分は省略して巻末の經名卷数を記入して終っている。

字塔周辺に描かれた經意絵で各幅共通の要素についてのべると、字塔

の上空にはこの塔を供養する意味で、飛天、リボンをつけて飛ぶ樂器、散花などがあり(但し巻二、巻八は上空まで絵がかきこまれているのでこれらは描かれてない)、字塔の左右は海に見立て銀泥で海波を随所に描いている(但し巻一、巻二はこれがない)。従って、U字形の陸地の底辺部に塔が立ち、塔の背後は海(又は空地)になっていて、左右の場面は塔と地続きであることがわかるように表現されている。これは談山神社本と全く同じ構成法である。また全体に各場面は余白を残さず描きつづけられているので充填的な構図となり、各場面は相互に樹木や岩山など利用し合う。この点は絵巻の場面転換における画面構成と同じである。

これら字塔周囲の絵は金泥を主に銀泥を従として描かれるわけで、紺紙見返絵と同手法であるが、ただ通常の紺紙見返絵とは異って、仏、菩薩や人物、鬼形、動物などの肉身部を金泥、或いは銀泥でぬりつぶし、目鼻や手足の指などの細部の輪郭を墨線で描き起し、さらに仏、菩薩、人間の口には朱を点じている。⁽⁶⁾肉身部の金、銀のぬり分けは、如来や主要な菩薩は金泥であるが他は全体的なバランスから金、銀が使い分けられている。なお鬼形はすべて金泥、動物はすべて銀泥でぬられている。また建物の壁面は銀泥をぬり、土坡は金、銀両様であるが、霞は銀泥で、輪郭を金泥でくくったところが目立っている。

このようにして描かれた字塔周囲の絵は、各幅ともその内容がかなりの数の場面なり情景に分かれている。したがって、各場面には銀泥重廓の短冊形ないし色紙形に、それぞれの図相の説明に必要な經句が金字で題されている。この題辭はその図相の内容によって、經の長行と重偈が区別なく共に用いられている。そして、それらは誤字ないし省略はあつ



挿図 3 a 法華經金字宝塔曼陀羅 卷一 京都 立本寺藏 b 同 見取図

ても、原則的に改変されたところは認められない。また、その図様は忠実に経内容と一致しているので、これらによって、そこに表わされた図

の筋を通した。その場合、「(偈)」を末尾につけてこれを示した。一、経説の内容と図相を一層明らかにするため、題されていない前後の経句

相の主題なり内容は容易に知ることができるのである。

しかし、各幅の画面は、いずれも数品の内容が多場の場面に分かれて、しかも錯綜して配されているので、各図の相互関係を知ることが必ずしも容易ではない。そこで、各幅について、その題辭を経の記述にしたがって(但し、重偈の場合は長行の位置においた)番号をつけて整理し、その図相の意味するところを考察したいと思う。

四

この曼陀羅は前述した通り法華經八卷の各巻を一幅毎にあてて描いているが、各幅における所説の品は一箇所にまとまっているとはかぎらない。各品が二分、三分され、それらが互に錯綜して入り込んでいる場合が多いのである。しかし、全体としてみると、品次の早いものが塔下に位置して、順次上方へ、向右侧を昇り、ついで左側を昇ってゆくように配置されている。

次に、各幅について考察をすすめるが、記述にあたっては、次の要領によって書き表わすことにする。

一、各幅は品別に分類したが、題辭番号は幅(巻)毎に通し番号とした。

一、重偈の部分はその内容に応じて長行の位置におき、経説の筋を通した。その場合、「(偈)」を末尾につけてこれを示した。

や、省略された経句を必要に応じて「」中に補足した。また、題辭の「乃至」「云々」で省略を意味する場合は、(省略)と註記し、必要に応じてその下「」中に省略されたと思われる経句を補入した。

一、経本文と照らして、一たん切れる所には()中に、大正大藏經第九卷法華部の頁数を入れ、本文上の位置を示した。

一、刊本(大正大藏經所収)との相違は右側に小字でこれを示した。

一、図相の説明では題辭番号を()中に記入して題辭との関係と、画面における位置を示した。

卷一 第一幅(挿図3)

序品第一 ここで描かれる主題は、釈迦の放光瑞と、その光に照し出される他土の六瑞である。すなわち、

1 余時佛放眉間白毫相光。照東方萬八千世界。靡不周遍。下至阿鼻地獄。上至阿迦尼(吒天)(二中)

2 照于東方 萬八千土 皆如金色 從阿鼻獄上至有頂 諸世界中 六道衆生

生死所趣(二下)

3 又都諸佛 聖主師子 演說經典 微妙第一(二下)

4 或有行施 金銀珊瑚 眞珠摩尼 車碾馬腦 金剛諸珍 奴婢車乘 寶飾輦輿

歡喜布施 迴向佛道(三上)

5 我見諸王 往詣佛所 問無上道 便捨樂土 宮殿臣妾 剃除髮鬚(鬚髮)而被法服

(三上)

6 〔又見菩薩 勇猛精進〕入於深山 思惟佛道 又見離欲 常處空閑〔深修禪

定 得五神通〕(三上)

字塔の下、やや左に鷲峯山があり、中央に宝樹を背にして釈迦の説法像が諸菩薩に圍繞されてあらわされている。釈迦の肩間白毫からは四方に光明が放たれ、字塔基壇右側には阿迦尼吒天と五仏、その下方に人の腕をかじったり、食物が火となって苦しむ餓鬼たち、更に下方に火焰のうずまく塀の内に、舌をひ

きのばされて釘をうって張られた罪人をかこんで、これを苦しめる獄卒、馬頭、悪獸が描かれる。『往生要集』にみる阿鼻地獄の形相「從其口中、拔出其舌、以百鉄釘、而張之」を示したものである。また左側の下端には、女を追って樹木を登ったり降りたりして苦しむ罪人(衆合地獄)、と互に相争う異形の阿修羅を描く(1・2)。塔基壇の左側には光明の至る岩山の窟中に修行する僧(6)を描きだしている。

字塔最上方の左側には高山の下で説法する如来とそれを聴く諸人(3)、右側は鷲峯山下の釈迦の前で剃髮する者を描く(5)。この剃髮場面の横に有髮の者が僧形と相語る有様が描かれていて、事件の發展が示されている。剃髮場面の下には宮殿があり、その前庭で諸々の財宝を布施している光景が示されている(4)。馬や象のような動物も荷物と共に施されたようである。

方便品第二 描かれる主題は過去における成道者の作善で、その具体例を示している。

7 或有起石廟 栴檀及沈水 木檣并餘材 甌瓦土等 若於廣野中 積土成佛廟

8 乃至童子戲 聚沙爲佛塔 如是諸人等 皆已成佛道(八下)

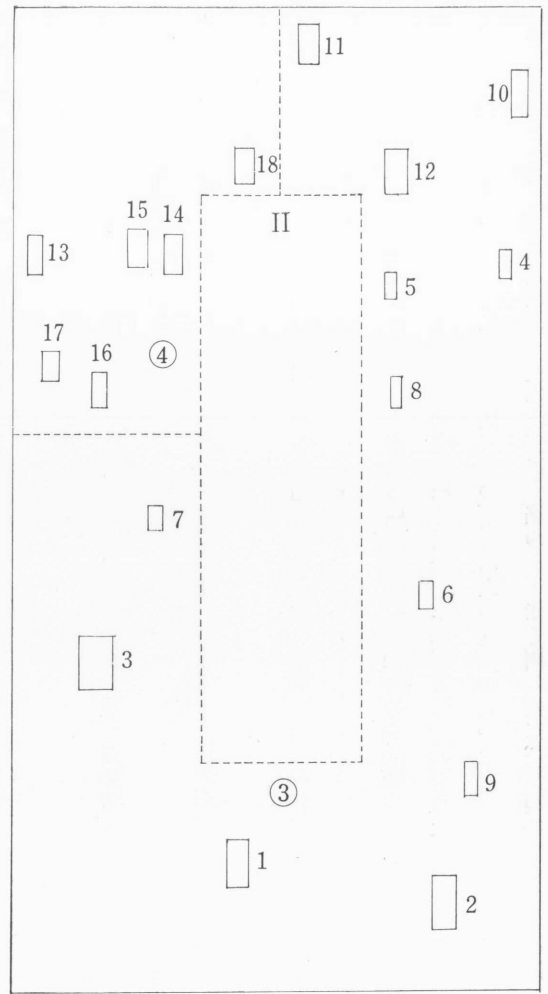
9 綵畫作佛像 百福莊嚴相 自作若使人 皆已成佛道(九上)

10 簫笛琴箏篪 琵琶鐃銅鈸 如是衆妙音 盡持以供養 或以歡喜心 歌唄頌佛

德〔乃至一小音 皆已成佛道〕(九上)

図相はいずれも作善の有様で、字塔の左側初層の横に塔を造る人々(7)と、砂をあつめて塔を造る童子(8)を描き、その上に屋内で仏画を描き、仏像を彫成する人々をあらわしている(9)。その上方、仏説法会の下に塔の前で音楽を奏する人や賛頌を唄う人、供物を捧げる僧を描いている(10)。

以上が第一幅の図相である。画面全体としては、上方の左右と塔下に釈迦説法会の光景をおいて、安定した構図を定めている。このように上方に説法会を対照的に配置する構図法は中尊寺の字塔曼陀羅でしばしば行なわれるところで



挿図 4 a 法華經金字宝塔曼陀羅 卷二 京都 立本寺藏

b 同 見取図

の絵画化としてはわかりやすいといえよう。

卷二 第二幅 (挿図 4)

譬喩品第三 ここに描かれる主題は、火宅の譬喩、即ち、三界を火宅に譬え、三乗を羊、鹿、牛の三車に譬え、一仏乗を等一の大白牛車に譬えた法華經中、最も有名な譬喩と、この譬喩に対応しながら一仏乗を説く合譬である。

1 有一大宅 其宅久故 而復頓弊 堂舍高危 柱根摧朽 梁棟傾斜 基陛頽毀 (備・二三下)

2 如此種種羊車 鹿車 牛車 今在門外 可以遊戲 汝等於此火宅 宜速出來。(一二下)

3 余時長者各賜諸子 等一大車 其車高廣 象寶莊校 周市欄楯 四面懸鈴 又於其上 張設繡蓋 (二三下)

以上が火宅の譬喩として描かれる場面で、画面の下方左側に火宅が図示されている(1)。火宅には童子たちが戯れるが、すでに扉をはじめ本屋の屋根から火焰があがり、鬼形の者や狐狼の類がかいまわっている。門の外には天蓋つきの車をひく羊車、鹿車、牛車が置いてある(2)。火宅の上方、字塔基壇の左横には、父の長者から与えられた等一大車(牛車)に五人の童子が乗って、父の教えをきく有様が描かれている(3)。

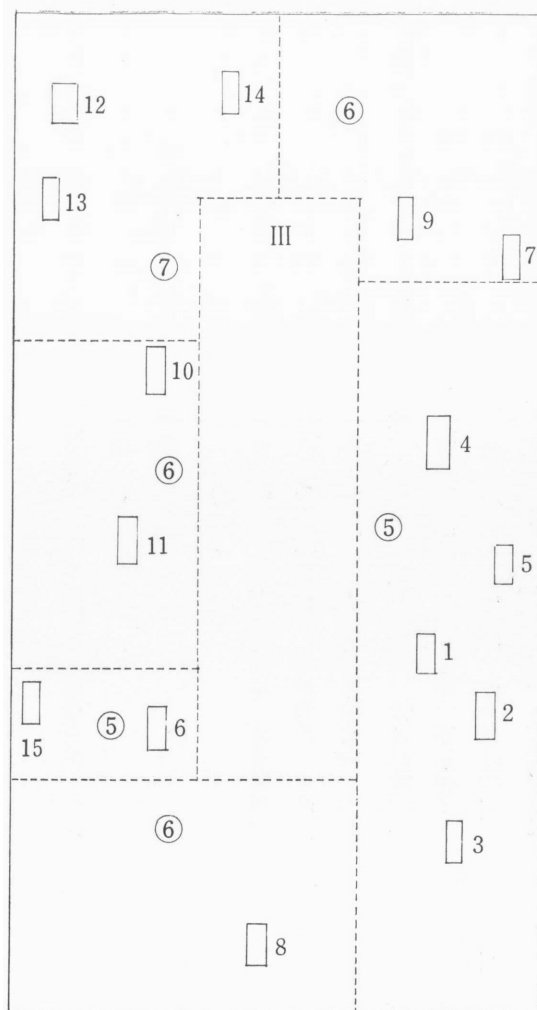
以上が火宅の譬喩に関する図相である。次に、この譬喩に合せて舍利弗に説く譬喩としてここに取扱われるものは、

4 生苦 5 老苦 6 病苦 7 死苦 (一三上)
8 〔貧窮困苦〕 愛別離苦

9 怨憎會苦 (如是等種種諸苦) (一三上)

ある。一方、談山神社本で必ず上方に位置した天界はここでは下方に位置して

10 〔欲〕 速出三界。自求涅槃。是名聲聞乘。如彼諸子 (省略) 爲求羊車。出於火宅



挿図5 a 法華經金字宝塔曼陀羅 卷三 京都 立本寺藏

b 同 見取図

卷三 第三幅 (挿図5)
 葉草喻品第五 ここでは「三草二木」の譬喩が絵の主題となっている。すな

菩薩が樹下に示され(6)、「三草二木」の図相は完備するのである。

わち、人天、二乗、三藏菩薩を小、中、大の葉草に譬え、上根、下根の菩薩を、大小の樹に譬え、仏の平等大慧を一味の慈雨に譬えて、三千大千世界の草樹が悉く一味の雨によって平等にうるおされ、生長するを説くものである。

1 惠雲含潤 電光晃曜 雷聲遠震云(一九下)
(惠) (潤) (省略)

2 其雨普等 四方俱下 流樹无量 率土充洽(一九下)
(樹) (無)

3 一切衆生 聞我法者 隨力所受 住於諸地 或處人天 轉輪聖王 釋梵諸王 是小藥草

4 知无漏法 能得涅槃 起六神通 及得三明 獨處山林 常行禪定(得緣覺證 是中藥草)

5 求世尊處 我當作佛 行精進定 是上藥草

6 又諸佛子 專心佛道 常行慈悲 自知作佛 決定無疑 是名小樹

7 安住神通 轉不退輪 度无量億 百千衆生 如是菩薩 是名大樹(二〇上)

この品の図相は字塔右側と、基壇左側に描かれる。先ず、初層右横に雲上の雷神と雨神が下界に雨を降らし(1・2)、その下方に宮殿があって、天女が葉草を持って舞い降り、宮殿に坐す王が葉草を臣民から捧げられている。宮殿の前には広々と葉草園があって、葉草をつむ男がおり、天女(或は貴婦人か)たちがくつろいでいる(3)。雷神の上方には山中の洞窟に苦行する有髪の行者がおり(5)、その上方には崖下の小堂に如意を持って僧形が坐っている(4)。また霞を隔て、その上に二本の大樹が意味ありげに描かれる(6)。次に基壇の左側には対坐する二

授記品第六 この品は、仏が迦葉と須菩提、迦旃延、目連の四人にそれぞれ

記を授けて如来となるべきを証明することを説くもので、描かれるところの主
題は、記を授けられた喜びと安心は、飢えた国から来て忽ちに大王の饈に遇っ
たのに、心は猶、疑懼を懐いて、未だ食しない。それを王の教え(授記)を得て
食して安楽になるが如きものと説く譬喩と、授記をうけた声聞たちの仏供養の
光景である。

8 如從飢國來 忽遇大王饈 心猶懷疑懼 未敢即便食〔若復得王教 然後乃敢
食〕(偏・二一七)

9 須菩提供養佛已(二一中)

10 是迦旃延 當以種種 妙好供具 供養諸佛(二一下)

11 大目犍連 捨是身已 得見八千 二百萬億 諸佛世尊 乃至(省略)〔爲佛道故

供養恭敬 於諸佛所 常修梵行 於無量劫 奉持佛法 諸佛滅後 起七寶塔

長表金刹 華香伎樂 而以供養 諸佛塔廟(云々)(二二上)

字塔基壇の下から左側にかけて、城門を入った所で大王から饈をふるまわれ
る飢国の人が、未だ食することせず、食物が盛られた饈の前に坐っている光景
が描かれている。王は宮殿の中からこれを見ている(8)。この図様は本品を総
括する経意絵である。

字塔上方右側には須菩提の仏供養が、塔婆を礼拝する須菩提の姿を描いて示
される(9)。また、字塔左側の中央部に、迦旃延と目連の仏供養が図される。

迦旃延は仏菩薩が坐す法会の横で多宝塔を礼拝している(10)。その下方、目連
は仏菩薩の法会の前で多宝塔に礼拝し、歌と奏楽の供養が行なわれている(11)。

化城喻品第七 この品は大通智勝仏の十六王子の出家にいたる因縁と、仏道

に導くための方便としての化城喻が説話的内容となっているが、本曼陀羅では
後者が取りあげられている。

12 五百由旬。險難惡道。曠絶無人。怖畏之處。若有多衆〔欲過此道。至珍寶

處〕

13 有一導師。聰慧明達。善知險道乃至(省略)〔通塞之相〕(二五下)

14 以方便力。於檢道中。過三百由旬。化作一城(二六上)

すなわち、險難惡道に怖畏の感を懐いて、途中から帰ろうとした者の為に導
師が一城を化作したという説話で、図は字塔の上方左側に一大岩山(12)を描い
て、そこを登って行く人々が、途中で僧形の導師に遇って教えをうけ(13)、頂
上に近いあたりの建物の前で休息(14)し、さらにその背後の山の向う側で、仏
殿に到着してこれを礼拝するという過程を描きだしている。ストーリーの経過
を追って描いている点、説話画として興味のもたれる場面である。

なお、この幅には、字塔左側の下、葉草喻品の小樹を示した所(6)に題辭を
書かない短冊形(15)がある。これについては、書き忘れたものか、間違っ
てここに区画したものか、明らかにすることはできない。

卷四 第四幅(挿図6)

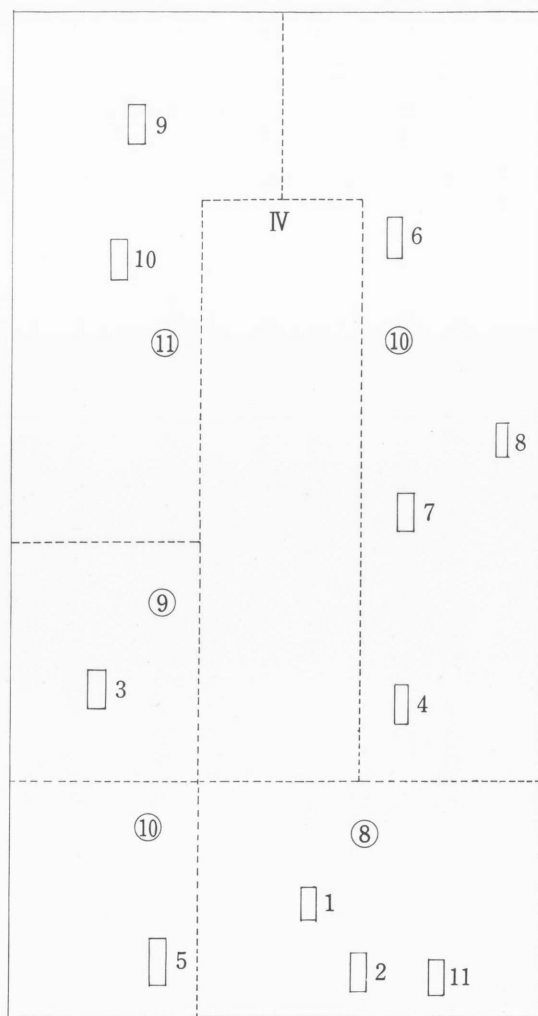
五百弟子受記品第八 ここで扱われる主題は、五百の阿羅漢が仏前にて受記
を得た喜びを譬喩であらわした有名な衣裏繫珠の物語である。

1 〔譬如有人〕至親友家。醉酒而臥〔是時親友。官事當行。以無價寶珠。繫其
衣裏。與之而去。其人醉臥。都不覺知。起已遊行。到於他國。爲衣食故。勤
力求索〕甚大艱難(二九上)

2 於後親友。會遇見之。乃至〔而作是言。咄哉丈夫。何爲衣食。乃至如是。我
昔欲令汝得安樂。五欲自恣。於某年月。以無價寶珠。繫汝衣裏。今故現
在。而汝不知勤苦憂惱。以求自活〕甚爲癡也(二九上)

この題辭はかなり省略されていて、これだけではよく筋が通らないので、以
上補った。図は下方に描かれ、字塔の右下側に位置している。

大邸宅があって、奥の部屋では臂まくらで臥す男とこれに対坐する男が描か
れ(1)、外の廊下に高杯に乗せた宝珠が置かれている。正面の建物では、再会



挿図 6 a 法華經金字宝塔曼陀羅 卷四 京都 立本寺藏

b 同 見取図

の友が相語り、食膳をかこむ有様が描かれ、また庭先に坐りこんだ貧しい友が示されている(2)。なお貧友は肉身が銀泥で塗られていて区別がつけられる。

6 如人渴須水
水(三二上)

また、この建物の下には(2)とならんで題辞のない短冊形(11)が区画されている。以上の図様は、同一の建物を舞台として描き出された異時同図形式の表現といえるものである。古い伝統がよく活かされている。

授学無学人記品第九 この品は、阿難と羅睺羅が授記を得、さらに二千人の学無学の声聞に記を授けることを述べるが、ここで扱われる主題は、多くの声聞が授記を得たことに対して疑念を懐いた八千の新發意の菩薩を示すものである。

3 余時會中。新發意菩薩八萬人。云(省略)咸作是念。我等尙不聞。

諸大菩薩。得如是記。有何因緣。而諸聲門。得如是決(二九下)

図相は字塔初層の左側に示され、やや大きく表わした菩薩坐像の前に多くの菩薩が合掌して坐っている有様である(3)。

法師品第十 ここでは、妙法華經を供養し、護持弘通する法師の諸功德と、法華經を見、聞き、受持することによってさとりに近づくことが得られることを高原穿鑿の譬喩で示している。

4 當知如來滅後。其能書持。讀誦供養。爲他人說者。如來則爲。以衣覆之。

5 又爲他方。現在諸佛。之所護念。是人有大信力。及志即力。諸善根力。當知是人。與如來共宿。則爲如來。手摩其頭(三一中)

穿鑿於高原 猶見乾燥土 知去水尙遠(漸見濕土泥 決定知近

7 「若說法之人」獨在空閑處^(閑) 寂莫無人聲^(無) 讀誦此經典〔我爾時爲現 清淨光明身〕(三三中)

8 「若人具是德 或爲四衆說 空處讀誦經」皆得見我身(三三中)

この図相は字塔左側の下部と、字塔右側に描かれている。左側の下部には、断崖の下にある庵室で経机を前に合掌する僧形のところへ如来が現れ、右手をさしのべて、いままさにその頭をなでようとする光景が描かれている(5)。字塔右側では、基壇の横に、経机を前にして合掌する法師の前に、如来が左手に衣を懸けて出現するところが示され(4)、その上方には、洞窟中で法華経を誦する法師のもとへ象に乗った普賢菩薩が空から到来し、窟の外に異形の者が合掌している(7・8)。但し、この図は勸発品の図相のように思われ、異形の者は十羅刹をあらわしたものと考えられる。

高原穿鑿の譬喩は右側上方にあって、高い岩山の頂上で鋤を手にした二人の男が土を掘っている姿であらわされている(6)。この図様は紺紙経見返絵によくみられるところである。

見宝塔品第十一 ここでは、多宝如来の宝塔の出現を主題としている。

9 「於是釋迦牟尼佛」以右指開七寶塔戶。出大音聲。如却關鑰^(鑰)。開大城門。10 即時一切衆會。皆見多寶如来。(三三中)

この図相は字塔左側の中ほどから上の部分に描かれ、釈迦説法会の前に、地中から出現したばかりの宝塔が示されている。宝塔の周囲の菩薩たちがいずれも胸から下を雲にかくされているのは、地から出たばかりで、この品の巻頭に「爾時仏前。有七宝塔。高五百由旬。縦広二百五十由旬。從地涌出。住在空中。」と説かれるところを示すものと考えてよい。また、その塔が「住在空中」した有様は、上方に示され、その下に諸人がこれを礼拝している(9・10)。なお、「從地涌出」の宝塔は未だ戸が閉まっているわけであるが、本図ではそれが開かれた形に描かれている。

卷五 第五幅(挿図7)

提婆達多品第十二 ここでは法華経を求めた王が無上菩提を願って、阿私仙について修行精進した物語と、文殊の涌出及び竜女の成道を主題として扱っている。前者については、

1 「爲欲満足。六波羅蜜」勤行布施。乃至^(省略)「心無憍惰。象馬七珍。國城妻子」奴婢僕從。(三四中)

2 「爲於法故」捐捨國位。委政太子。

3 擊鼓宣令 四方求法(三四下)

4 時有仙人。來白王言「我有大乘。名妙法華經。若不違我。當爲宣説」

5 王聞仙言。歡喜踊躍

6 即隨仙人。供給所須「採果汲水。拾薪設食。乃至以身。而爲床座」(三四下)

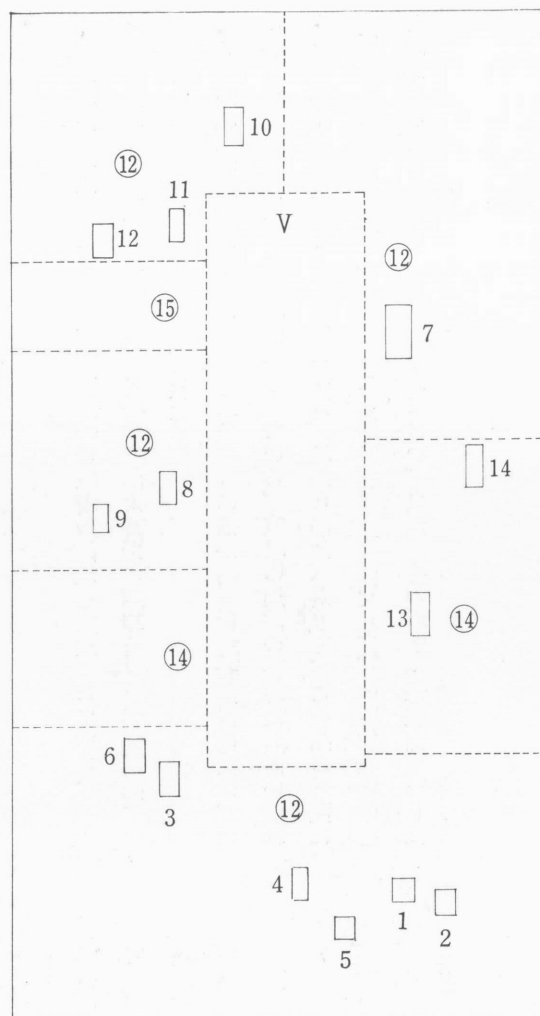
この求法王の物語は字塔下方の画面いっぱい描かれている。中央には王の宮殿があって、門の所では王自から出座して諸々の品物を布施し(1)、輦に乗った王が示される(2)。宮殿の一隅に鼓楼の楼台が設けられ、そこで童子が太鼓をうっている(3)。宮殿の中央の間には王が坐し、そこに来た仙人と相話している(4・5)。そして、王は宮殿を捨て、泣きかなしむ家臣たちをのこして、阿私仙に従って山に向う。山中の岩窟では仙人が経を開き、その岩山の周辺には、水を荷い、薪を荷い、また果をひろう男が示されている(6)。これらの男はいずれも仙人に給仕する王の労働をあらわしたものである。

次に、文殊の出現と竜女成仏は、

7 「爾時文殊師利。坐千葉蓮華。(中略)從於大海娑竭羅龍宮。自然涌出。住虛空中。詣靈鷲山」從蓮華下。至於佛前。頭面敬禮。二世尊足。修敬已畢(三五下)

8 爾時龍女有一寶珠。乃至^(省略)「價直三千大千世界。持以上佛。佛即受之。龍女謂智積菩薩。尊者舍利弗言。我獻寶珠。」世尊納受。「是事疾不」(三五下)

9 「當時衆會。皆見龍女。忽然之間」變成男子。具菩薩行



挿図 7 a 法華経金字宝塔曼陀羅 卷五 京都 立本寺蔵

b 同 見取図

12 成等正覺 (三五下)

竜女成道の話を読む文殊師利の出現は、字塔右側の上方に示される。すなわち、天空から飛天が散華供養する二仏并坐の多宝塔が多数の護法神、僧俗にかこまれて雲氣中に浮かび、下方から多くの菩薩たちと上昇して来た文殊が、蓮華座からおりて、塔を合掌礼拝する姿であらわされている(7)。

次に竜女成道の光景は、字塔左側の中程から上の方にかけて描かれている。鷲峯山下の釈迦の法会に、海から現れた竜女が宝珠を捧げ(8・9)、そのやや上から雲気が上昇して、竜女が昇天する。そして画面上方には、南方無垢世界の仏殿と聖衆に囲まれた如来の姿が昇天する竜女と相対し、浄土の周辺の池には蓮華が花を咲かせている(10・11・12)。

勸持品第十三 この品に関する題辭がなくこの曼陀羅では取扱われていない。

安樂行品第十四 ここでは、諸法の中、法華経が最も貴いこ

とを説いた転輪王髻中明珠の譬喩が主題となっている。

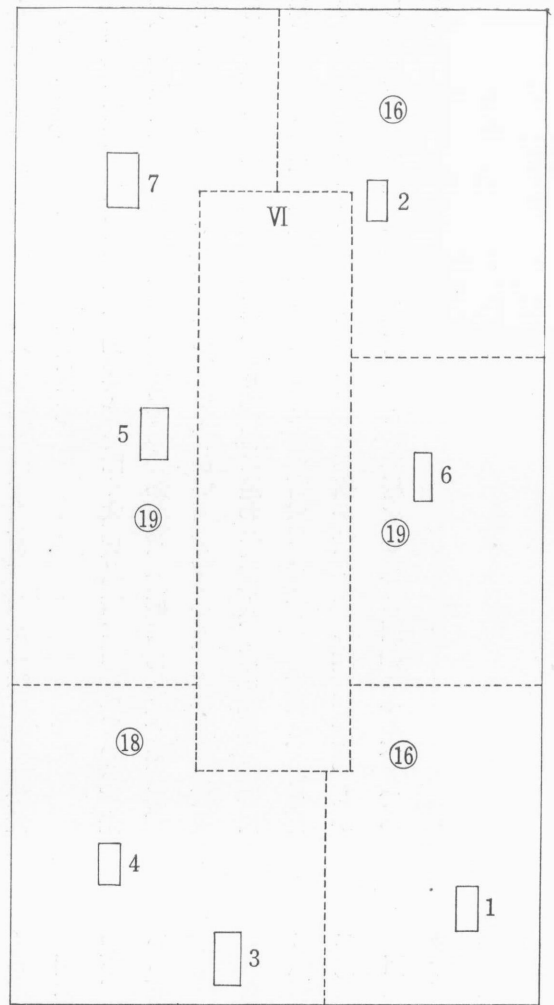
13 譬如強力 轉輪之王 兵戰有功 賞賜諸物 (三九上)

14 如有勇健 能爲難事 王解髻中 明珠賜之 (三九中)

凶相は字塔初層部の左右にわたって示されている。左側では楯をならべ、弓矢や槍などで相戦う戦士たちが描かれる。注意すべきは、これらの戦士の甲冑は日本の武装である。右側では、王から諸種の賞品が与えられる光景(13)と、その上方で、

床座にかけた転輪王が一戦士に髻中の明珠をとりだして与える所が描かれている(14)。

10 即往南方無垢世界
11 坐寶蓮華



挿図 8 a 法華經金字宝塔曼陀羅 卷六 京都 立本寺藏

b 同 見取図

ているのは、この品所依ではないかと考えられる。いまかりに題辭をつけるなら、

佛説是時。沙婆世界。三千大千國土地。皆震裂。而於其中。有無量千萬億菩薩摩訶薩。同時涌出。(三九下)
 とでもすればよろしいかと思われる。

卷六 第六幅(挿図 8)

如來壽量品第十六 仏の寿は、実は不滅なのであるが、而も滅度する所以は、衆生を救わんが為の大慈悲の方便であり、衆生に懈怠の念を起させぬ為に滅度すること、良医の妙薬に譬えて説く譬喩と、釈迦の常住する靈鷲山浄土がここでは主題となっている。前者では、

1 擣蓐和合。(子) 與此令服(四三上)

と画面右下方にこの良医妙薬の譬喩場面があり、図は邸宅中病に苦しむ男と、庭で薬をつきあわせる医師二人を示す(1)。

2 常在靈鷲山 及餘諸住處(四三下)

この図は画面右上方にあって、天宮には瑞雲、散花、飛天が舞い、靈鷲山がそびえて、その下で釈迦説法像が示されている(2)。

分別功德品第十七 この品に関するものはない。

隨喜功德品第十八 ここでは法華經聽聞の喜びと、その功德を主題としている。

得聞是經典 乃至於一偈 隨喜爲他說 如是展轉教 至於第五

從地涌出品第十五 この品に関する題辭はないが、字塔左側の竜女成道の場

面中、南方浄土の下に、地中から涌出する多宝塔と菩薩たちの頭部が図示され

3 若人於法會

十(四七上)

4 見彼衰老相 髮白而面皺(四七中)

図相は画面左下部に示される。一字の仏堂の前で、それぞれ天蓋をかけた一對の礼盤上に僧形が対坐し、一人は柄香炉、一人は如意を持っている。その前では聴聞の人々が坐していて、これは法華会の光景かと思われる(3)。その左手には相語る三人(二人は僧形、一人は俗形)が坐しているが、これは展転して教える有様であろう。仏堂の横には三人の老人が描かれている(4)。

法師功德品第十九

ここの主題は、法華経を受持、読、誦、解説、書写する人の得る諸々の功德を示すもので、右の行をした人は、下は阿鼻地獄から、上は有頂天に至るまでの万象を見聞知することができ、諸々の利益を得るとい

う。

5 (父母所生耳 清淨無濁穢 以此常耳聞 三千世界聲) 象馬車牛聲 鍾鈴螺

鼓聲 琴瑟箏篳聲 簫笛之音聲 清淨好歌聲 聽之而不著(四八上)

6 地獄衆苦痛 種種楚毒聲 餓鬼飢渴逼 求索飲食聲

7 諸阿修羅等 居在大海邊 自共言語時 出于大音聲 如是說法者 安住於此

間 遙聞是衆聲 而不壞耳根(四八上)

図相は字塔右側の中程と、左側の下部を除く大部分の所に描かれている。先ず、字塔、三四層附近の左側に、屋内での音楽演奏、前庭にあそぶ象、馬、牛、また家の裏手に牛車がひかれて行く有様が描かれる(5)。それらとほぼ並行して字塔右側に地獄の釜ゆで、劍葉の樹に追われた罪人、食水餓鬼(6)が図示される。また、左側の上方には海辺に建つ宮殿で食事する阿修羅と、その庭で武器をととのえている異形の者たち(7)が描かれ、上空に飛天が飛ぶ。しかしこの塔上空の左右にある供養図は、この字塔を供養する図相とみるべきである。

卷七 第七幅(挿図9)

常不輕菩薩品第二十 ここでは、いかなる人に向っても、常に礼拝して止む

ことのなかった常不輕菩薩の本事物語が主題となっている。

1 有一菩薩比丘。名常不輕。得大勢至乃(省略)。以何因緣。名常不輕。是比丘。凡有所

見。若比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。皆悉禮拜讚歎。而作是言。我深敬汝

等。不敢輕慢。所以者何。汝等皆行菩薩道。當得作佛。而是比丘。不專讀誦

經典。但行禮拜。(五〇下)

2 衆人或以杖木瓦石。而打擲之。避走遠住。猶高聲唱言。(五〇下)

図相は画面下方の右半分に示される。字塔の基壇の下、霞に屋根を覆われた邸宅で、常不輕菩薩は杖や石をもった家人に追いはらわれる(1)。また、乱暴をはたらく人々を崖の上から合掌して礼拝する常不輕が描かれている(2)。

如來神力品第二十一 ここでは如來の神力の威大なることが図示される。

3 舌相至梵天 身放无数光

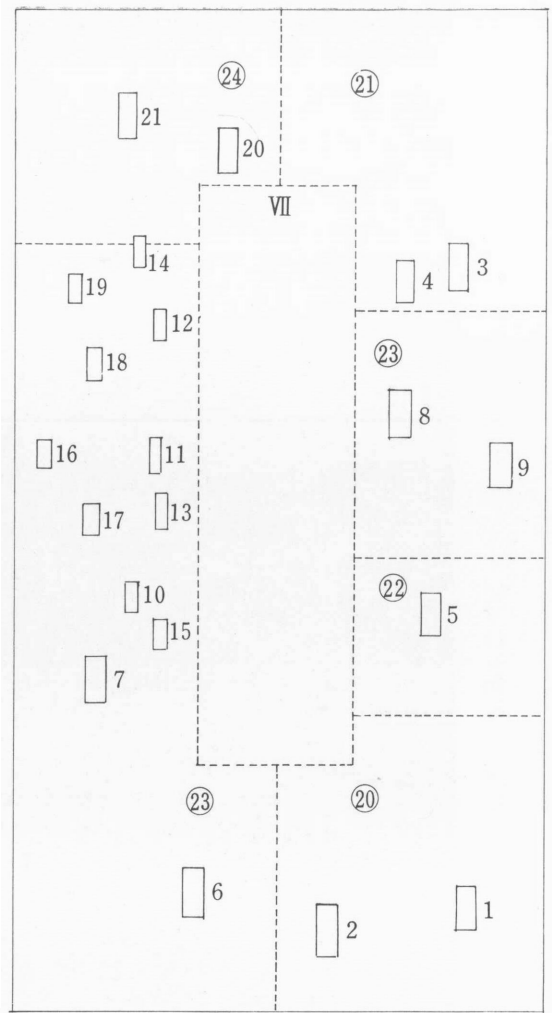
4 爲求佛道者 現此希有事(五二中)

図は字塔右上方に描かれる。上空に天界(梵天)の建物が雲に乗っており、その下、地上では八如來が坐していて、各如來の口から舌がのびて天にとどいている有様が描かれる(3・4)。題辭を端的に描いた図相である。

囑累品第二十二 卷頭にある釈迦の大神力を主題として扱っている。

5 「爾時釋迦牟尼佛」從法座起。現大神力。以右手摩無无量菩薩摩訶薩頂。(五二下)

図は字塔初層の右側に示され、台座からおりた釈迦が右手をさしのべて、敬恭合掌する菩薩の頭をなでているところが描かれている。釈迦の台座からは光が放たれている(5)。



挿図9 a 法華經金字宝塔曼陀羅 卷七 京都 立本寺藏

b 同 見取図

薬王菩薩の本事としては、

6〔爾時一切衆生意見菩薩〕見佛滅度。悲感懊惱。戀慕於佛。

〔即以海此岸〕梅檀爲積（積）。供養佛身。而以燒之。火滅已後

7收取舍利。作八萬四千寶瓶。以起八萬四千塔。高三世界。

（五三下）

8即於八萬四千塔前。燃百福（莊）庄嚴臂（五三下）

9（爾）余時諸菩薩。天人。阿修羅等。見其無臂。憂惱悲哀。而作是

言〔此一切衆生意見菩薩。是我等師。教化我者。而今燒臂。

身不具足〕（五四上）

この薬王菩薩本事の図相は、画面左下部と字塔中程の右側にあり、先ず、左下部には仏涅槃図を描いて（6）、仏滅度を示す。その上方、字塔初層の左側に蓋様のものが火焰につつまれていて、仏の荼毘の光景があり、その下に宝形造の堂で舍利瓶を作るのを僧たちが拝んでいる（7）。字塔の六層右側には三基の多宝塔があつて、その前で燃えあがる両腕を前にのべて一切衆生意見菩薩が蓮華座に坐している（8）。そして、その下方には、両臂を失くした菩薩坐像を人々が礼拝し、そのそばに異形の阿修羅が描きそえられている（9）。なお図様ではこの阿修羅も、礼拝を受けているように描かれている。

次に、法華經を受持する者の得る諸利益については、諸種の譬喩でもって示される。

〔此經能令。一切衆生。離諸苦惱。此經能大饒益。一切衆生。充滿其願。如清涼池。能滿一切。諸渴乏者〕

10如寒者得火。11如裸者得衣。12如商人得主。13如子得母。

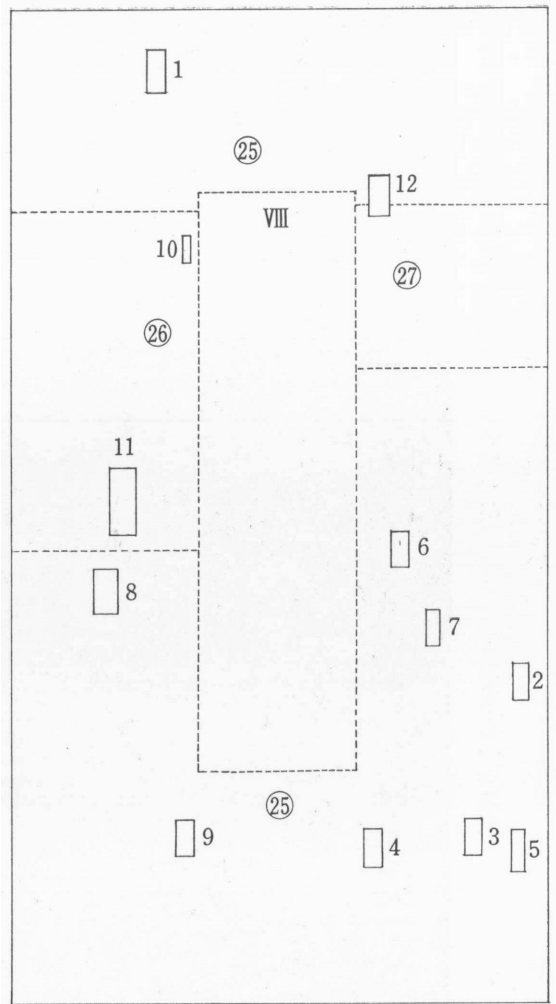
14如度得船。15如病得醫。16如暗得燈。17如貧得寶。18如民得王。19如賈客

得海。〔如炬除暗。此法華經。亦復如是〕（五四下）

薬王菩薩本事品第二十三 ここにおいては、薬王菩薩の本事である一切衆生

意見菩薩の物語と、法華經受持の利益を主題としている。

立本寺藏 妙法蓮華經金字宝塔曼陀羅図について



これらの図は字塔左側にそって描き出されている。いずれも題辭の各語句を端的に絵画化したものである。

挿図10 a 法華經金字宝塔曼陀羅 卷八 京都 立本寺藏

b 同 見取図

- 6 或遭王難苦
- 5 〔念彼觀音力〕
- 〔臨刑欲壽終〕

- 4 〔或被惡人逐〕 墮落金剛山
 - 3 〔念彼觀音力〕 如日虛空住
 - 2 〔或在須彌峯〕 爲人所推墮
 - 1 〔入於大海。假使黑風吹其船舫〕 飄墮羅刹鬼國。其中若有乃至（省略）一人。稱觀世音菩薩名者。是諸人等。皆得解脫。羅刹之難（五六下）
- 卷八 第八幅（挿図10）
 觀世音菩薩普門品第二十五 ここでは觀音を念ずることによつて得られる諸々の利益を主題の中心に扱っている。

妙音菩薩品第二十四 ここでは妙音菩薩が淨光莊嚴國から娑婆世界の鷲峯山に往詣して、釈迦及び多宝仏塔を礼拝し、法華經の威大であることを宣説するという次第を扱っている。
 20 余時釈迦牟尼佛。放大人相。肉髻光明（五五上）
 21 于時妙音菩薩。於彼國沒（省略）與八萬四千菩薩。俱共發來（五五下）
 すなわち、妙音菩薩の發來が主題となるわけで、図は字塔左側の上方面にあって、釈迦から放たれた光明が下方の如来を照し、經に説く、諸仏の世界を遍く照すことを示す（20）。次に、上空から妙音菩薩が樂天をひきつれて雲に乗って飛來する光景を描いて（21）、妙音菩薩の發來を図示する。釈迦の前にある水辺には蓮華数茎が描き添えてあるが、これは、妙音菩薩が來詣の願意を釈迦の眼前に示そうとして、淨光莊嚴國にありながら化作した蓮華である。

7 「念彼觀音力」 刀尋段段壞（五七下）

以上は觀音力を念ずることによって、諸々の災難からのがれることができることを説くもので、図相は字塔の上方と、右側の中程から下にかけて描かれている。すなわち、字塔上方には、左の方に羅刹国があつて、諸種の羅刹が居り、山の頂上から電光の如き光が放たれて、右の方の船を難破させている（1）。また、字塔右側の中程では、王の前にとらわれて来た男が、刀で斬られようとするが、その刀はばらばらに折れてしまうという光景が描かれ（6・7）、その下には、山の頂上から突き落された男が、無事に地面に坐っているところ（2・3）と、さらに、金剛山の頂上に追いつけられぬ男が、頂上から突き落される光景（4・5）が示されている。また、題辭はないが、字塔に近い水辺で、二人の男が岸に泳ぎつこうとする有様が描かれていて、これは

若爲大水所漂。稱其名號。即得淺處（五六下）

と經にある利益を圖したものと考えられる。

次に、觀音を供養札拜することによって得られる利益として、

8 若有女人。設欲求男。禮拜供養（省略）觀世音菩薩。便生福德智慧之男（五七上）

また、觀音に対する供養については、無尽意菩薩が觀音に供養のため奉納した珍宝の瓔珞に関する話がとりあげられている。

9 「即時觀世音菩薩。啟諸四象。及於天龍人非人等。」受其瓔珞。分作二分（省略）

〔二分奉釋迦牟尼佛。一分奉多寶佛塔〕（五七下）

これらの図は字塔左側の下半分のところに描かれている。字塔初層の左横に一字の堂があり、そこで女性が一心に合掌札拜している（8）。しかし、觀音の姿は見られない。また、基壇の下方中央に釈迦説法の法会が図示され、その左横に、觀音菩薩に無尽意菩薩が瓔珞を奉っている姿が描かれている（9）。中央の釈迦は觀音から瓔珞が奉納される釈迦を示したものと考えられるが、この幅が第八幅目で、法華經の最後の巻であるから、そのしめくりとして、この位置に釈迦説法会を描いたのではないかと考えられる。また、画面左下端に、

立本寺藏 妙法蓮華經金字塔曼陀羅圖について

岩山にかこまれて、鳥居のある道祖神的な小祠があり、祠の前で御幣様の物を持って拝む男と、口から吐瀉する女が描かれている。この図相からは悪阻の女が無事出産を祈願しているように思われるが、この小祠の形も問題であり、これを觀音に結びつけるには、いささか躊躇される。しかし、本地仏を觀音とする日本の神祠とみれば、理解できなくもない。

陀羅尼品第二十六 この品は法華經の受持者を擁護するための陀羅尼神呪が

のべてあり、ここに扱われる主題もまた法華經受持者の擁護に関するものである。

10 「以是神呪」擁護法師。

11 我亦自當。擁護持是經者。令百由旬内。（無）无諸衰患。（五九上）

図相は字塔左側にあつて、第九層の横に窟内で經机を前にして坐す僧がおり、窟の外に五軀の天部が合掌して侍立する（10）。その下、海波を隔て一字の堂舎に、仰臥する男と、それを見まもる二人の男が居り、その堂舎にむかつて多くの女神が雲に乗って降りてくる。題辭を欠くが、これは熱病を除くために現れた十羅刹女と思われる。またその下方に一堂あつて、堂内には僧が經机を前にして坐している（11）。これらはいずれも持經者を擁護する光景で、特に窟内の僧の場合、天部が侍立するのは、この題辭が毘沙門天の神呪に関する經句であることに関連するものと思われる。

妙莊嚴王本事品第二十七 この品は、葉王・葉上の両菩薩が前世にあつて、

妙莊嚴王の二子淨藏、淨眼であつた時、外道を信受する父母に勧めた法華經に帰依させるといふ物語を述べている。したがって、ここでも、この物語に関するものが扱かわれていて、二子が父母の前で、法華經を説く雲雷音宿王華智仏の威大なることを示すために諸々の神変を現じたことが示されている。

12 身上出火 身上出水（經文では身上出水 身下出火 身上出火と

なる(六〇上)

凶相は字塔右側の上部にあって、大邸宅の一室で二人の童子が母と相語る光景があり、また、庭前で童子が神変を現している。一人は頭から火、足下から水を、一人は頭から水、足下から火を吹き出させている(12)。母子の語る光景は、

二子到其母所。合十指爪掌白言。願母往詣。雲雷音宿王華智佛所。(五九下)と経にのべるところである。

普賢菩薩勸発品第二十八 この品は普賢菩薩が法華経の受持者を守護することを説くものであるが、この曼陀羅の第八幅では、この品に関する題辭もまた凶相もない。一般の見返絵では山中で法華経を読誦する僧のもとへ、六牙の白象に乗った普賢菩薩が空から降下してその身を現わすという凶相になっている。しかし、前述したように、第四幅の法師品に、このような凶相が描かれている(7・8)ことをここに付記しておく。

以上が本曼陀羅における法華経の大意絵で、その題辭と凶相及び、画面上の位置について述べた次第である。

五

各幅の主題并に凶相は、法華経二十八品に説かれるすべてを扱っているわけではないが、しかし、経巻見返絵の限られた場面に比較すると、非常に多いといわねばならない。談山神社本について記述した時、その主題と凶相を整理して表記したので、本曼陀羅についても、次に列記することにした。

卷一

序品第一。「放光瑞、諸瑞」阿迦尼吒天、地獄、餓鬼、阿修羅、仏説法、布

施、剃髮、山中修行僧、

方便品第二「成道者の作善」造塔、聚沙造塔の童子、仏画製作、仏像製作、多宝塔奏楽供養、

卷二

譬喻品第三「火宅譬喻」火宅、三車、一大牛車、生、老、病、死、愛別離苦、怨憎会苦、三乘(比丘にて表わす)

信解品第四「長者窮子」帰国・囚執・労働の窮子、長者の宣言。

葉草喻品第五「三草二木」雷神・雨神、転輪聖王の宮殿と葉草園、苦行行者、比丘、大樹、对座の樹下菩薩、

授記品第六「四大声聞授記・供養仏」大王膳、須菩提供養仏、迦旃延供養仏目連供養仏・供養塔、

化城喻品第七「化城譬喻」登山の旅人、導師の教示、化城休息、仏殿到着

五百弟子受記品第八「衣裏繫珠譬喻」睡眠男と宝珠、再会旧友

授学無学人記品第九「新発意菩薩の疑念」菩薩群像

法師品第十「法華経供養」仏摩頂、仏衣授与、普賢来現、羅刹衆合掌、高原穿鑿譬喻

見宝塔品第十一「多宝仏塔出現」仏塔涌出、住在空中の多宝塔

卷五

提婆達多品第十二「求法の王」王宮殿、財宝布施、鼓樓、阿私仙登城、王の出城、山中阿私仙、採果、汲水、拾薪の王、「竜女成道」多宝仏塔前に文殊出現、釈迦法会中に竜女出現、竜女昇天、南方無垢世界、

勸持品第十三

安樂行品第十四「転輪王髻中明珠譬喻」戦闘、恩賞授与、髻中明珠の授与。

從地涌出品第十五「菩薩涌出」多宝塔と諸菩薩の涌出

卷六

如来寿量品第十六〔良医譬喻〕 病人と良薬調合、〔靈鷲山淨土〕 釈迦說法会
分別功德品第十七

隨喜功德品第十八〔法華經の功德〕 法華会、転教法師、

法師功德品第十九〔法華經受持の功德〕 象・馬・牛、音楽演奏、地獄、餓
鬼、阿修羅、

卷七

常不輕菩薩品第二十〔常不輕菩薩本事〕 増上慢家と受難菩薩、退避菩薩の礼
拜、

如来神力品第二十一〔如来の神力〕 雲上の宝殿、如来の舌相、

囑累品第二十二〔釈迦の神力〕 釈迦菩薩の頂を摩す、仏台座放光、

葉王菩薩本事品第二十三〔葉王本事―一切衆生意見菩薩物語〕 仏涅槃、茶

毘、舍利瓶製作、焼臂供養塔、無臂菩薩と阿修羅、〔持經の利益〕 寒者得火、

裸者得衣、商人得主、子得母、渡得船、病得医、暗得燈、貧得宝、民得王、賈
客得海

妙音菩薩品第二十四〔妙音菩薩の発来〕 釈迦放光、照諸仏土、妙音菩薩發
来、仏前蓮華化作。

卷八

觀世音菩薩普門品第二十五〔觀音力〕 羅刹国、難破船、刀身折断、山頂より
突き落される男、金剛山に追いあげられ、頂上より落される男、浅瀬に泳ぎつ

く男、男の子を求める女、〔觀音供養〕 釈迦說法会、無尽意瓔珞を觀音に捧ぐ、
小祠礼拜の男女、

陀羅尼品第二十六〔持經者擁護〕 修行僧を天部が擁護、堂内誦經僧、病人を
十羅刹女が擁護、

妙莊嚴王本事品第二十七〔妙莊嚴王本事〕 二子母と語る、身上出火身下出水、
身上出水身下出火の二童子

普賢菩薩勸發品第二十八

立本寺藏 妙法蓮華經金字宝塔曼陀羅圖について

以上、約一二〇の場面が数えられる。これらを通観すると、画題として
選択された場面は、説話性のつよい、本事、譬喻に因む内容のものが
多く、その際、物語の展開にともなう時間の経過をもちこんで表現して
いる。火宅譬喻、長者窮子、化城喻、衣裏繫珠、王と阿私仙、竜女成道
譬中明珠、常不輕菩薩、葉王本事、妙莊嚴王本事などがそれで、特に長
者窮子、衣裏繫珠、王と阿私仙、妙莊嚴王本事では異時同図式にあらわ
している。また、化城喻、王と阿私仙、竜女成道、譬中明珠、妙莊嚴王
本事は内容も充実していて、連続的に場面が展開しており、時間的経過
が一層よく示されている。

次に、地獄乃至六道が比較的詳細に描かれていることは注目してよい
であろう。第一幅序品と第六幅法師功德品にそれらはみられる。このこ
とは談山神社本に於いても同様であった。『吉記』承安三年七月九日条
にみる最勝光院御堂障子絵に関する記事

御堂障子絵可被画法花経仏像并地獄之類、全不可憚之由有仰、

を引用するまでもなく、法華經と地獄思想のつながりを示唆するとみて
よいであろう。さらに、中世における地獄への一般的関心⁽⁷⁾が、このよう
な地獄絵重視の画面を形成したものと考えられるのである。

また、觀音に関する図相も第八幅の上方と下半部に大きくスペースが
さかれていることは、世人の觀音信仰を反映した配置であろう。このよ
うな、世人の関心を把えた題材の扱い方は、譬喻乃至本事説話の画面構
成と相俟って、法華經を平易に解き示すにきわめて効果的である。その
意味で、この曼陀羅は法華經変相であり、また法華經二十八品大意絵と
いうことができるのである。

面効果をあげている。

塔形については、両本とも九層塔であるが、談山神社本が初層に裳階をつけて、十層の観であるのに対し、立本寺本は、裳階をつけていない。しかし、立本寺本の基壇には周囲に高欄が設けられ、正面には階段がついているが、談山神社本にはこれらがなく、基壇の基部に蓮華座が線描きされている。なお、談山神社本では、基壇の上面に経文が書写してあるが、立本寺本はこれがない。

これに関連して、中尊寺の金光明最勝王経金字宝塔曼陀羅の塔形についてのべると、これは初層に裳階があり、基壇には高欄、階段がつき、基部に蓮華座が経文で描き出され、基壇上面は経文の書写がない。したがって、塔形からいうと、三者三様の相違があるわけであるが、立本寺本はどちらかというところ、中尊寺本に近い要素が多い（挿図11・12参照）。

文字の書きだしは、いずれも相輪の中心頂上から始まるが、最後の所は、談山神社本は、最後の経句、経名、巻数（例、妙法蓮華経卷第一）で終るように計算し、基壇で調整がとられている。これに対し、立本寺本は前述のように経頂偏で調整し、中尊寺本は最後の経句で終る調整がない。

塔初層安置の如来像については、談山神社本は各塔とも如来像は一軀であるが、立本寺本は各塔とも二仏并坐で示されている。

また、談山神社本は各幅とも、塔下に鷲峯山釈迦説法会の群像が描か

次に、本曼陀羅、すなわち立本寺本と談山神社本を比較し、さらに中尊寺本を参考にして、本曼陀羅の性格を明らかにしたい。

六

画面の印象からいうと、立本寺本は金泥が鮮麗であるのに対し、談山神社本は不純物を含む青金で書写し描かれているので、画面全体が不鮮明になっている。また、中尊寺本は絵に彩色が施されていて、異った画

挿図12 金光明最勝王経金字宝塔曼陀羅
卷九 岩手 中尊寺蔵

挿図11 法華経曼陀羅 卷四
奈良 談山神社蔵

れているが、立本寺本は、第一幅と第八幅にのみ、説法会が描かれるだけで、特に第八幅は鷲峯山は無く、また両幅とも会衆は少く、小規模な集会となっている(図版I参照)。その反面、当然ながら、塔下のスペースが経意絵にあてられている。そして、各幅とも、比較的重要な場面が、この塔下に描かれているようである。

各幅の諸図相の配置は、談山神社本は、原則的に品が進むにつれて画面の左下部から字塔の左側を上に向って昇り、右側に移って、上から下へと降ってゆく。あたかも字塔下の説法図を起点として「の」字を書くように配置されている。また、二品からなっている第一幅は、上下に分かれて、下の方が第一、上が第二となっている。これに対し立本寺本は前記したように、各品が二分、三分され、それが互に入り込んでいる場合が多い。しかし、全体的にみて、品次の早いものが塔下、または塔の

挿図13 法華経曼陀羅 卷七 京都 談山神社蔵

右下に位置して、順次、右側を上方へ昇り、ついで左側も下方から上方へと進んでいる。また、中尊寺本は、塔の右側を上から下へと進み、次に左側を上から下へと降りるように配置されている⁽⁸⁾。

各主題については、談山神社本は原則的にはまとまって描かれているが、内容によってその位置に制約のあるものがあり、それは、その主題(品)の重要場面がどこに位置しているか、天に在るべきもの、すなわち(阿)阿陀尼吒天(第一幅)、兜率天、切利天(第八幅)、或は雲上の多宝塔(第四幅)はいずれも、最上端の虚空に描かれ、地獄、餓鬼、阿修羅(第一、六幅)などの悪趣は最下部に位置している。そのほか、他品の領域に混入して配されるものがあり、それらは理由無くそうだったとは思われぬ場面ばかりで、⁽⁹⁾ 図相相互間の錯綜はかなりあり、また各場面は連続的につながっているので複雑な構成となっている(挿図13参照)。これに対し、立本寺本は、場面数は約一二〇で多いようにみられるが、しかし、談山神社本の約二一五場面に比べて半数に近く、また一、二の例外はあっても各主題はその内容に忠じてまとまって配置されており、談山神社本にみるような連続性は少い。さらに画面上の配置にも、談山神社本にみるような制約がないので、各場面は理解しやすいまとまった画面に構成されている。しかし、画幅全体の構図配置からいうと、談山神社本より画面の充填密度がうすく、全体的に迫力にやや欠ける憾がないではない。一方、中尊寺本は、各幅とも字塔の上方左右に必ず鷲峯山(但し第八塔は普通の山容)と釈迦説法図が配されている。このことは、いささか形式的で、またくどいようでもあるが、経意としての説話性よりも構図上のバランスと裝飾性に重点をおいて画面を構成する意図があることを

示すものである。また、画面全体にゆとりがあつて、大らかな構図に示されており、このような所に、日本のかつ王朝趣味が窺われる。

談山神社本と立本寺本の各品においてとりあげた主題の数は大差ないが、絵画場面の数を比較すると、前記したように、談山神社本は立本寺本の約二倍あつて、構図上、より充墳的にならざるを得ないが、それだけに譬喩乃至本事説話は内容的にもまた表現の上でも充実した場面を描きだしている。これに対し、立本寺本はやや簡略になつており、各主題別に簡潔にまとまつた形をとっている。それだけに、説話図として、やや物足りなさを感じるが、しかし、画面全体が中尊寺本に近いすっきりとした趣きとなつてゐることは、注目すべきで、このような画面構成に、立本寺本の談山神社本と異なる造形上の特色が認められるのである。

次に題辭の扱いについてのべると、談山神社本は一幅について一三乃至四六の題辭が書かれ、八幅の合計は二〇四である。立本寺本は一幅に七乃至二一で、合計一〇六の題辭を数える。両者のこの数量からみても、談山神社本の方が、題辭全体が内容的にも充実していることは明らかであるが、さらに各品の題辭相互の脈絡がよく、あたかも一つづきの文章を適当に区切つて、画面に散らして書写したと云つても過言でない程である。これに対し、立本寺本は、前記した題辭の補足個所を見てもわかるように、かなり省略された所があり、また題辭相互の脈絡がはっきりせず、題辭をたどるだけでその意味を理解することのできないものが多い。談山神社本に比べて題辭の存在が軽視されて書写されていることは否定できないのである。

なお、中尊寺本の題辭は經の品名と尊名、人名や個有名詞が主で、長

文の經句はあまり書かれていない。

以上、字塔形式の三遺品について比較対照しながらのべてきたが、塔の形をはじめとして、構図配置、題辭の扱い方などを通観すると、立本寺本は、談山神社本と中尊寺本の中間に位置しているように見られる。

これは、その製作年代が両者の中間にあるというのではなく、表現上の問題において、このように考えられるのである。

中尊寺本は、その絵画表現において、宋朝絵画の影響と藤原絵画の融合がみられ、また裝飾性が意図されて、王朝的趣きが少なからず感じられるものであつて、その製作は一応藤原秀衡が鎮守府將軍に就任した嘉応二年(一一七〇)を目安として想定するものである⁽¹⁰⁾。これに対し、談山神社本は説話の絵画的表現に重点がおかれ、その表現においては、中国ないし朝鮮の絵を祖本として、製作されたと考えられる所が多く、充墳的な画面構成⁽¹¹⁾、霞による画面区分の絶無、そして合理的な画面構成などがその特色としてあげられる。そして、製作年代は、これを所蔵した紫蓋寺の創建年代である文治三年(一一八七)と推定するものである⁽¹²⁾。

中尊寺本と談山神社本の性格を概略以上のように考えてみると、中尊寺本は日本的、談山神社本は中国的と約言することが可能である。立本寺本はその中間にあるというわけであるが、しかし、主題からいつても、また、その描写様式も談山神社本と共通していて、仏像、人物などの肉身部を金泥或いは銀泥で塗り、唇に朱を点じる方法も全く同じであり、全体の構図法も充墳的で、談山神社本の様式を継承していることは間違いないのである。しかし、談山神社本に比べて、絵の場面数が約半数に減少して、画面の充墳密度が薄くなり、ゆとりのある構成になつて

示すといえるのである。聖徳太子絵伝の諸本を例にとっても、延久元年（一〇六九）の東博法隆寺館本にみる画面の複雑な構成は時代の降下とともに単純化され、整理されたものとなり、長文の題辞も短いものとなっているのである。したがって、立本寺本の絵の場面数の少いことや、各場面がまとまって描かれていることは、一種の整理が加えられて、簡略化したものと理解されよう。また、題辞に於いても同様である。

これらのことから、立本寺本は談山神社本の系統を受けついで製作されたものと考えられるのである。しかし、立本寺本は談山神社本を省略しながら、いわば抄本的に模写製作したものであるから似たものもあるが）、談山神社本にない授学無学人記品第九、陀羅尼品第二十六の題辞と場面を立本寺本で描いていることや、また立本寺本が、勸持品第十三、分別功德品第十七、普賢菩薩勸発品第二十八を逸していることなどを考えると、両本の直接的な継承関係は否定すべきである（挿図14・15参照）。

以上のように、説話図としての性格と、その表現様式の推移から、両本を比較すると、立本寺本は年代的に談山神社本より降る製作で、また内容的にも劣るといわざるを得ない。しかし、このことは、立本寺本の製作された時代の美術一般の傾向と照合して考えなければならぬであろう。すなわち、鎌倉時代美術に共通する合理主義と、明快な造形性を志向する世人の造形意識が、立本寺本の画面構成にはみられるのである。そして、その造形感覚が、敢て、主題と内容に省略を加え、

いることや、題辞が簡略化していることは、中国的な談山神社本から、日本的な中尊寺本への接近を意味する。すなわち、文字塔曼陀羅における和様化を立本寺本にみいだすのである。かかる意味において、敢て中尊寺本を比較の対象に用いた次第である。

また一方に於て、説話図の発展（或いは衰退）の一般的な推移からみて、談山神社本と立本寺本を比較すると、明らかに談山神社本は古様を

挿図14 法華經曼陀羅 普門品 部分
奈良 談山神社蔵

挿図15 法華經金字宝塔曼陀羅 普門品 部分
京都 立本寺蔵

構図配置を整理して、一段と明解な画面をつくりだしたのであって、ここに鎌倉という時代の特色をみいだすのである。

ではこの文字塔曼陀羅の製作年代は何時頃におけばよいであろうか。前述したように、談山神社本より降ることは確かである。写経の書体も、いわゆる藤原写経の和様をおびた写経体ではなく、

勁硬な書体で形式化した鎌倉時代の写経体の特色をもっている(挿図16)。しかし、絵の描法は如来形の面貌や鬼形にや

挿図16 法華経金字宝塔曼陀羅 卷一 部分 京都 立本寺蔵

思われるのである。

以上、京都、立本寺蔵の妙法蓮華経金字宝塔曼陀羅についての紹介と、その製作年代やわが国文字塔遺品における立本寺本の位置などに関する私見をのべた。しかし、この文字塔形式のものに関連する宝塔経や他の類品、法華経二十八品大意絵の作例などについては、前稿との重複をさけてここでは何もふれる所がなかった。したがって、本稿だけでは十分でなく、注1に示した談山神社本、中尊寺本についての拙稿とあわせて読んで頂ければ幸である。

注

1 『美術研究』二二二—二二三号「談山神社蔵法華曼茶羅について上・中・下」
『仏教芸術』七二号「金光明最勝王経金字宝塔曼茶羅図私見」

2 八幅の法量は左の通りである。

- 第一幅 縦一一・四種 横五八・五種
- 第二幅 縦一一・〇種 横五八・七種
- 第三幅 縦一一・二種 横五八・五種
- 第四幅 縦一一・五種 横五八・七種
- 第五幅 縦一一・四種 横五八・七種
- 第六幅 縦一一・二種 横五八・七種
- 第七幅 縦一一・〇種 横五八・七種
- 第八幅 縦一〇・〇種 横五八・八種

3 『美術研究』三四号「法隆寺舍利殿宝物注文」(公刊)による。

4 注3公刊によせた荻野三七彦氏の略解による。

5 頂経偈の全文は左の通りである。

願以此功德 普及於一切 我等与衆生 皆共成仏道

6 仏・菩薩や人物の肉身部を金・銀泥で塗り、墨緑で細部を描起し、口に朱を点す

きびしさがみられるが、全般的におだやかな面貌や姿態で示されていて、描線もあまり硬くなっていない。また、山水樹草などの自然景も、十二世紀の紺紙経見返絵に共通の経絵スタイルをもっていて、暢達した線描きで描かれているが、水波の一部に一種の乱れがみられる。一体に、金銀泥絵の経絵の製作年代を描法から推定することは甚だ困難であるが、以上のべたような、この曼陀羅にみられる描法から判断して、鎌倉時代も前期の十三世紀中葉を降りえないと考えることが穏当のように

る描法は、談山神社本にもみる所で、これは平安後期紺紙経見返絵では殆んど行なわれておらず、大陸系の画法の影響が強いように思われる。『美術研究』二二三号 拙稿注63参照。

7 中世における地獄絵については『古美術』二三号の拙稿「日本の地獄絵」を参照されたい。

8 注1拙稿を参照されたい。また法華経の品次順序にしたがう図相の配置方法については、「の」字形の配置法は、敦煌壁画の法華経変にもみられる配置法であり、下から上へと配列されるものに創神社蔵八相涅槃図の左右縁辺の仏伝図があり、この場合、向右侧が先きで、次に左側となり、立本寺本と同じ順をとっている。

9 前掲拙稿（『美術研究』二二二—二二三号所載）を参照されたい。

10 前掲拙稿（『仏教芸術』七二号所載）を参照されたい。

11 画面に余白をあまりつくりくらず充填的に構図した経見返絵としては、談山神社蔵の細字法華経見返（『美術研究』二二三号図版Ⅱ・Ⅲ）や延暦寺蔵、金銀交書妙法華経見返があり、いずれも古様で、しかも中国的な画趣が濃厚である。また宋版法華経の見返も充填的な画面構成である。また、肉身部を塗る手法も、高麗経見返によく見られる所で、中国ないし、海彼の様式と考えられる。

12 前掲『美術研究』二二三号参照。